宋詞研究

南宋篇

村上哲見 著

村上哲見著

〔東洋学叢書〕

宋詞研究

南宋篇

刊行　創文社

村上　哲見（むらかみ・てつみ）
1930年中國大連市に生まれる．1953年京都大學文學部卒業．京都教育大學，奈良女子大學，東北大學の助教授・教授を歴任して東北大學名譽教授．文學博士（京都大學）．
〔著書〕『李煜』（岩波書店，中國詩人選集），『三體詩』（朝日新聞社，朝日文庫），『唐詩』，『科擧の話』（以上講談社，學術文庫），『漢詩と日本人』，『中國の名句・名言』，『漢詩の名句・名吟』（以上講談社），『蘇州・杭州物語』，『陸游』（以上集英社），『中國文人論』（汲古書院），『宋詞』（筑摩書房，中國詩文選），『宋詞の世界』（大修館書店），『宋詞研究　唐五代北宋篇』（創文社）など．

〔宋詞研究　南宋篇〕

二〇〇六年一二月二〇日　第一刷印刷
二〇〇六年一二月二五日　第一刷発行

著者　村上哲見
発行者　久保井浩俊
印刷者　藤原愛子

発行所　株式会社　創文社
〒101-0051
東京都千代田区麹町二-六-七
電話　〇三-三二六三-七一〇一
振替　〇〇一二〇-〇-九二四七二
http://www.sobunsha.co.jp

著者との申し合せにより検印省略　藤原印刷・鈴木製本

ISBN 978-4-423-19265-8　Printed in Japan

目　次

第一章　綜　論……三
第一節　北宋詞と南宋詞……三
第二節　現實派、士大夫の詞……一四
第三節　典雅派、文人の詞……二五
第二章　辛稼軒詞論……二九
第一節　官歴について……二九
第二節　稼軒詞の諸相……五九
一　稼軒の交遊とその詞……五九
二　閑居の詞……六九
三　農村詞……七六
四　晩年の感懐……七九
第三節　歴代諸選本における稼軒詞……八四

第三章　姜白石詞論……一〇〇
第一節　「當行」と「別派」……一〇一
第二節　その生涯と著述……一〇五
第三節　周邦彦・吳文英と白石……一一〇
第四節　周濟『宋四家詞選』における白石詞……一一〇
第五節　宋代の詞選における白石詞……一一六
第四章　吳夢窗詞論……一一一
第一節　出身と經歷……一一一
第二節　詞集の諸本……一一六
第三節　交遊と作詞……一一八
第四節　自度曲について……一一一
第五節　周邦彦と夢窗……一一六
第五章　周草窗詞論……一一九
第一節　家系と經歷および詞集……一一九
第二節　早期の詞――『蘋洲漁笛譜』……一一三
第三節　晩年の詞……一一〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

附　論

附論一　楊柳枝詞考……一八二
(一)　はじめに……一八二
(二)　白居易と「楊柳枝」……一八四
(三)　盛唐教坊の「楊柳枝」……一九二
(四)　樂府「折楊柳」と「楊柳枝」……一九七
(五)　中唐以後の「楊柳枝」……二〇七
附論二　陶枕詞考――『全宋詞』補遺……二二五
(一)　はじめに――雅詞と俗詞……二二五
(二)　白鶴美術館所藏の陶枕……二二八
(三)　陶枕詞の釋文……二二九
(四)　詞牌「七娘子」について……二三四
(五)　詞からみた陶枕の製作時期……二三七
(六)　もうひとつの陶枕……二三九

附論三　文人之最——萬紅友事略……二三五
(一)　はじめに——文人とは……二三五
(二)　萬紅友略傳……二三九
(三)　『詞律』擧例その一——「三臺」……二四一
(四)　『詞律』擧例その二——「醜奴兒近」……二四六
(五)　『璇璣碎錦』について……二五二
(六)　『詞律』と『欽定詞譜』……二五五

附　錄

一の一　日本傳存《漱玉詞》二種……二六六
一の二　關於《汲古閣未刻詞》知聖道齋本的討論（王水照・村上哲見）……二七六
二　日本收藏詞籍善本解題叢編類……二八六
三　釋詞二題……三〇二
あとがき……三二五
索　引……5
英文目次……3

宋詞研究　南宋篇

第一章　綜　論

第一節　北宋詞と南宋詞

北宋南宋という區分は、もともと政治的な事件とそれに伴う國家體制の變革によるものであるから、唐詩における初盛中晩などのようにどこで區切るかが問題になるようなことはなく、金の汴京占領、二帝北遷のあと、一一二七年の高宗の卽位を以て區切りとするほかはない。しかしその一方、四唐說などは元來が詩風の變遷のような文學の問題から考えられたものであるのに對し、南北宋の區切りは文學の側からみれば、いわば外からわくをはめられたのであるから、それが文學自體にとってどのような意味があるのかは、改めて考えてみなければなるまい。

宋代からすでに始まっている詞話詞論の類においては、明代あるいは清朝初期までは概ね個別的な詞人詞作に對する議論に限られ、北宋詞に對する南宋詞というような發想はほとんど見出すことができない。康熙年間に至って朱彝尊は『詞綜』の卷首において次のように述べる。

○世人詞を言うに、必ず北宋を稱す。然れども詞は南宋に至りて始めて其の工を極め、宋季に至りて始めて其の變を極む。姜堯章氏（姜夔、白石）最も傑出せりと爲す。〔世人言詞、必稱北宋、然詞至南宋始極其工、至宋季而始極其變、姜堯章氏最爲傑出〕（「詞綜發凡」）

右の一文は、個別的な議論を超えて北宋詞・南宋詞というとらえ方をしている點、文學史的思考の萌芽といってもよく、極めて注目に値する。姜夔を擧げているのも、南宋詞を代表する存在として擧げているごとくである。その後周濟はやはり北宋詞南宋詞の對比を問題にしつつ朱彝尊の說に異を唱えている。

○北宋詞は多く景に就きて情を敍ぶ。故に珠のごと圓らに玉のごと潤い、四もを照らして玲瓏たり。稼軒（辛棄疾）白石に至りて、一變して事に卽して景を做すを爲し、深き者をして反って淺く、曲なる者をして反って直ならしむ。〔北宋詞多就景敍情、故珠圓玉潤、四照玲瓏、至稼軒白石、一變而爲卽事做景、使深者反淺、曲者反直、〕（『介存齋論詞雜著』）

○北宋は樂章を主とす。故に情景は但だ當前を取り、窮高極深の趣き無し。南宋は則ち文人筆を弄び、彼此名を爭う。故に變化益多く、取材益富む。然れども南宋は門逕有り、門逕有るが故に深きに似て轉って淺し。北宋は門逕無し、門逕無きが故に易きに似て實は難し。〔北宋主樂章、故情景但取當前、無窮高極深之趣、南宋則文人弄筆、彼此爭名、故變化益多、取材益富、然南宋有門逕、有門逕故似深轉淺、北宋無門逕、無門逕故似易而實難、〕（「宋四家詞選目錄序論」）

右の二つの文章の說く所は決して單純ではなく、一概に南宋詞を貶しめるものではないが、北宋詞を更に一段優れたものとしていることは間違いあるまい。ただし周濟は右の後の文章（「宋四家詞選目錄序論」）の中で、

○塗を碧山（王沂孫）に問い、夢窗（吳文英）稼軒を歷て、以て淸眞（周邦彥）の渾化に還る。余の世の詞人爲る者に望む所は蓋し此くの如し。〔問塗碧山、歷夢窗稼軒、以還淸眞之渾化、余所望於世之爲詞人者蓋如此、〕

と述べており、北宋といっても南宋文人詞の淵源ともいうべき北宋末の周邦彥を究極の目標のごとくに掲げている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ので、巨視的にみれば朱彝尊とそれほど距りがあるわけではない。朱彝尊と共に『詞綜』を編した汪森の「詞綜序」には、

〇庶幾くは可く草堂の陋を一洗して、倚聲者（詞を作る人）の宗とする所を知らんことを。〔庶幾可一洗草堂之陋、而倚聲者知所宗矣、〕

とあり、二人の意圖は明代以來の『草堂詩餘』の流行にあきたらず、南宋の洗練を極めた慢詞を鼓吹する所に在ったので、その點では周濟も基本的には共通する。かつて乾隆帝をして「該處は人文の淵藪たり」といわしめた[1]清朝江浙地方の文化は意識的無意識的に宋代の文人文化を繼承するもので、康熙乾隆のころに詞學および作詞の風がにわかに盛になったのもその一端であったから、宋詞の中でも洗練という點では究極に達したといってよい南宋の文人詞が重んじられたのは當然であり、朱彝尊も周濟もその風潮の中に在って例外ではなかったということであろう。留意すべきは、右に擧げたような二人の言説は、北宋詞對南宋詞というとらえ方をしている點は從來の個別的批評のレベルを超えているといえるけれども、その間に歷史的な推移を見ようとする視點が缺落していることで、それはおそらく當時の文人たちの關心がもっぱら自らの創作の典範を求めることに在ったからに違いない。しかし文學史的觀點からすれば、北宋詞と南宋詞を對比して優劣を論ずるよりは、北宋詞より南宋詞への演變の樣相を見きわめることが、南宋詞を考察する第一歩であろうかと思う。

もともと唐代の燕樂や俗間の歌謠の歌辭に由來する詞は、晚唐の溫庭筠などを經て、五代の間に次第に獨自の文藝性を備えた韻文樣式として成長して來たが、北宋後半になってにわかに發展する。それはこの時代の社會において壓倒的に優位を占めるようになった官僚たち、いわゆる士大夫階層がこの韻文形式を自らの表現樣式のひとつと

位置づけるようになることと、互いに因となり果となっているであろう。もとより士大夫としての必須の基礎資格とされる詩文と同列に竝ぶものとはいえないが、それだけにむしろいっそう洗練された趣味感覺を表現するものとして愛好され、普及して行った。唐五代のころの詞はほとんどもっぱら男女の情愛、すなわち合歡のよろこびと、その反轉としての離別の悲しみ、孤獨の憂愁を詠ずるもので、隱遁もしくは閑適の情を詠ずるようなものが早くから無いではないが、特殊な一部の存在でしかなかった。やがて士大夫階層の人が身世の悲哀、不遇や流寓のおもいを詞に託することになり、高度の文藝性を備えるようになって來るものの、概ねは寄託、隱喩の手法により、そこに士大夫たるの生活を露わにすることはなかった。北宋半ばを過ぎるころから情況は大きく變る。宴席の興を添えるものという本來の性格が全く失われたわけではないが、士大夫、官僚としての生活の中での交遊の手段として、また生活體驗の描寫、その中での感懷などを表現するものとして普遍的にひろまり、そのことはこの樣式の內包する世界を飛躍的に擴大することになった。

西歐においては詩のテーマとして異性への愛が最も重要であるが、中國文學の傳統としてはそれよりも友情を重視するといわれる。(2) ただ中國でも歷史的にみれば古代歌謠においてはやはり男女間の愛の方が主要テーマであり、詩が士大夫のものとなってから友情が優勢になるという經過がある。詞についても時代はずれるがパターンとしてはほぼ同樣の經過をたどったといえるように思う。友情が詩の主要なモチーフとなることを端的に示す現象として、友人間の唱和贈答の詩のおびただしさが擧げられるが、詞についても同樣で、北宋後半になると、にわかに詞において唱和贈答の風が盛になり、その中で和韻の唱酬も始まる。それは唐五代から北宋初期までの詞にはほとんど見られなかった現象で、特に和韻の例は皆無だったといってよい。こうした風潮に大きな影響を及ぼした人物として先ず第一に張先（子野）に注目すべきであろう。張先は八十九歲の長壽を保ち、晚年を蘇杭の間に隱棲して過した

が、彼の詞の多くにはその詞がどのような場で作られたかをしるす前書きが添えられている。それは從來の詞にはほとんど見られなかったもので、そのこと自體、詞が士大夫階層の日常生活に浸透して來たことを示している。そしてそれらの前書きによって、當時この地方には名だたる官僚文人が知州や通判などとして次々に來任し、風雅な社交界が形成されていたらしいことが窺われ、その中で詞の唱酬がしきりに行なわれていたさまを具體的に知ることができる。おそらくこの隱退した長老を中心として詞を愛好する官僚文人の社交界が形成されていたかと想像される。注目すべきはその中に杭州通判であった蘇軾（子瞻、東坡）がいたことで、現存する作品からみる限り蘇軾はこの杭州在任中から詞を作り始めたと考えられる。その後蘇軾は官僚文人としての日常生活の中で詞を作り續け、獨自の詞風を確立した（彼の詞はしばしば「豪放」と評されるが、この評が適當でないことは後に詳說する）。當時の官僚文人社會における蘇軾の位置からいってその影響は大きかった。やがて作詞の風は社會の中樞を荷う官僚文人たちの日常的な文學活動の一部として位置づけられ、同時に詞は韻文樣式の一種としての地位を確立して行くことにもなった。もとより文學樣式の流行や興隆が特定個人の所業のみによってもたらされるはずはないけれども、北宋後半期における詞の飛躍的な發展に際しての張先と蘇軾の及ぼした影響は充分に評價されねばならない。

かくて詞は北宋後半において次第に官僚文人階層の日常生活に浸透し、普及して行ったのであるが、その趨勢は南宋になっても衰えることなく、というよりはいっそう加速されて行った。試みに詞集を殘している人が南北兩宋それぞれにどのくらいいるかを『京都大學人文科學研究所漢籍分類目錄』によって檢してみると、「集部、詞曲類、詞集之屬」に北宋四十四人、南宋百六十三人の詞別集を著錄している（輯本を含む）。もとより宋人の詞集のすべてがここに盡されているとはいえないであろうし、作者の南宋北宋という區別も考え方の違いがあり得るが、おおよその傾向として南北兩宋の間に相當大きな差があることは明らかに示されていると思う。

次に詞を作ることが普及浸透してくると、詞そのものに一種の大衆化、通俗化ともいうべき現象を生ずるのは當然であろう。日常的な文學活動の一部となり、唱和贈答が盛行したということは、社交の手段となったことを意味しており、もとよりその種の作にも深い感慨を寓したり、眞摯な友情を吐露したりすることによって優れた作品も生まれるけれども、往々にして空疏な、儀禮的な作品も作られたに違いない。そのことを窺わせる事象として賀詞の盛行がある。詞が歌曲として生きていた時代において、婚禮や落成などのさまざまな慶賀の機會に獻呈するには、詩文よりも詞が好まれたのではないかと思われるふしがあり、それらは賀宴の席で實際に歌唱されることも少なくなかったことであろう。特に顯著にみられるのは壽詞、すなわち生日の賀詞である。沈義父の『樂府指迷』と張炎の『詞源』のいずれもが壽詞の作法について特に項目を立てて述べており[3]、その流行ぶりが窺われると共に、この種の詞では殊に技法・テクニクが重んじられたことがわかるが、そのことを更に具體的に示す資料がある。『全宋詞[4]』末尾の無名氏の部には『(群書會元) 截江網』および『翰墨大全』なる二書に據って數百首にのぼる壽詞が錄されているが、この二書は創作の爲の實用的な教本、もしくは模範文集の如きものであったに違いない。殊に興味深いのは、『翰墨大全』の一部には正月初一から十二月三十まで、月日の順に百六十首が錄されていることである。もともと壽詞というのは特定の日(生日)をテーマとするものであるから、右によってその日の前後の作をみれば、その季節に應じた祝賀の辭が竝んでいるのだから、それらを下敷きにして一首を成すことは、多少習練を積めば容易なことであったと思われる。兩書とも南宋間の編に違いないが、この種の書は評判がよければくり返し刻されるもので、饒宗頤『詞集考』によれば、兩書ともに元刊本が存するとのこと(筆者未見)、とすればこの風習は元代に入ってもしばらくは衰えなかったらしい。壽詞流行のさなかでは、權勢を掌握した人の生日に獻上する作が蝟集したであろうことは容易に推測できるが、周密『齊東野語』に賈似道の場合が詳細にしるされている(「每

歳八月八日生辰、四方善頌者以數千計……」後出九二頁參照)。この種の詞に秀作が生まれるはずはなく、周密も「然れども皆な謾詞囈語のみ(然皆謾詞囈語耳)」と評している。朱彝尊も「詞綜發凡」において壽詞の流行は北宋末に始まることを述べるとともに、「殊無意味」と評し、『詞綜』にはほとんど採錄しなかったという。

○宣政(宣和・政和)より後、士大夫爭って獻壽の詞を爲るも、聯篇累牘、殊に意味無し。魏華父に至りては、則ち此に非ずんば作らず。是の集(『詞綜』を指す)千百の中に、止だ一二を存するのみ。華父と雖も亦た置きて錄せざるなり。〔宣政而後、士大夫爭爲獻壽之詞、聯篇累牘、殊無意味、至魏華父、則非此不作矣、是集千百之中、止存一二、雖華父亦置不錄也、〕

ちなみに右にみえる「華父」は魏了翁のこと、魏了翁は學者として有名だが、意外に社交的な人だったらしく、『鶴山先生長短句』に百八十餘首の詞を收め、そのほとんどが壽詞である。

文學史などに登場する南宋の著名な詞人たちの背後には、右にみたように廣大な作者群が存在し、大衆化通俗化が進行していたのであり、北宋におけるとは相當な差があったことを承知しておく必要がある。

さて詞には社交の手段という一面があるので右のような展開をみることにもなったのであるが、本來の性格からいえば抒情詩の一種であるから、士大夫としての生活の中でのさまざまな感慨を抒寫することが主要なモチーフとなるのは當然であろう。もとより贈答の作であっても、その中に自らの感慨を寓するのがむしろ通常であるから、抒情の作、社交の作という風に截然と二分することはできないが、創作の動機として基本的に二つの方向、つまり獨白的な作と相手を意識して作られるものとがあるとはいえるであろうし、後者はどうかすると阿諛迎合の賀詞にもなる。その一方、感慨を抒寫する作として南宋になって殊の外にめだつのは、憂國の慷慨もしくは悲傷を詠ずる作である。これは南宋のおかれていた狀況、すなわち終始金の壓迫の下に屈從を餘儀なくされていたことを思えば、

治國平天下を責務とする士大夫階層の人々において、憂國の情が創作の重要な契機となるのは當然であろう。北宋も遼の脅威を背負ってはいたが、南宋と金との關係はそれと次元を異にするといってよい。

そこで、社交の手段としての詞と心情を抒寫する詞との南宋における突出した事例として壽詞と憂國の詞とが擧げられるのであるが、この兩者は全く異質のようにみえるけれども決してそうではない。後に述べる「專業的な非官僚文人」のもっぱら典雅を旨とする超越的な詞風と對比すれば、どちらも官僚文人、理念的にいえば士大夫としての現實の生活を基盤としている點は共通であり、根底においてつながっている。北宋以來張先や蘇軾らを經て作詞の風が官僚文人たちの普遍的かつ日常的な文學活動の一部となったからこそ、當時官僚文人の生活の中で流行した生日の賀宴に際して大量の壽詞が作られたのであり、また常に金の壓迫の下に在った狀況は士大夫たるの責務を自覺する官僚文人の心情を搖さぶり、憂國の詞が生み出されたのである。ただし實用的な意味をもつ通俗的な動機と天下國家を憂える高尙な動機とが次元を異にするのは當然で、壽詞に佳作無しとされる一方で、後者は南宋における數々の名作を生むことになっている。

次に、北宋における詞の發展ということについては、さきに述べた日常生活への浸透とは別に、もうひとつの側面がある。北宋初期までの詞は唐五代のあとを承けて、概ね短篇の小令に限られ、長短の句をまじえ用いるとはいうものの、個々の句についていえば近體詩と大きな差はなかった。北宋半ば、仁宗朝のころから長篇の慢詞が次第にひろまり、大きな變化が起る。小令と慢詞の違いは、單に一首の詞が長いか短いかというにはとどまらないので、句法、押韻法、表現手法、ひいては詩境にさまざまな違いがある。北宋末から南宋になると、詞はむしろ慢詞を主流とするといってもよく、それによって詞は形態の面からもはっきりと古今體の詩と訣別し、獨自の韻文樣式とし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com